

望月論文へのコメント

吉村 幸

(長崎大学 アドミッションセンター)

望月論文は、「大学受験に対する意識や態度」といった『構え』について調査・分析を試みたものである。具体的には、首都圏の塾・予備校の夏期講習に通う教育人間科学部AO入試の受験予定者76名を対象に意見聴取を行い、その回答を高校受験時偏差値に基づいて分類した上位校の生徒(25名)と中下位校の生徒(51名)との間で比較している。その結果得られた知見として示されているのは、次の4つである。

1. 上位校の92.0%、中下位校60.8%が一般選抜でも同学部を受験する予定である
2. 上位校の大多数が国公立大学の一般選抜を受験する予定だが、中下位校ではその割合はあまり多くなく、むしろ私立大学との併願者が多い
3. 中下位校で「国公立型」の受験勉強をしている割合は68.6%であり上位校に比べ低い。
4. 上位校の生徒にとってAO入試は「合格可能性はともかく、志望している大学に合格するチャンスを広げる」位置づけであり、中下位校の生徒にとっては「志望校を受験する機会であると同時に、自己をアピールできるとともに、学力試験よりも合格可能性が高い」と位置づけられている。

これらの結果をふまえ著者は、①AO入試には一般選抜に比べ多様な学力レベルの「高校階層」からの志願者があり、その高校階層によって大学受験に対する「構え」が違う、②中下位校にみられたような「構え」では合格の要件である「センター試験900満点中6割以上を得点すること」を容易に満たすことはできないだろう、③選抜方法に関するアナウンスを幅広い「高校階層」に対して行い、大学受験に対する

「構え」の変容を促すこと、選考の進め方や基準の再検討が今後の課題である、と述べている。

さて、コメント論文の執筆を引き受けたものの、率直に言って評者には、著者が何を問題としているのかがよく分からないのである。なぜAO入試の最終選抜で不合格者がいることを問題視しているのか。なぜAO入試受験予定者の特性を高校階層に着目して調べることが重要な課題となるのか。そもそも「構え」と何なのか。著者によると「構え」とは「大学受験に対する意識や態度」のことらしいが、少なくとも一般選抜受験予定や出願予定の選抜方法、受験勉強している教科数は「意識や態度」とは言えず、本論文中にはAO入試の受験理由以外にそれらしいものが示されていない。

また、調査対象となった76名が実際の志願者全体をどの程度代表するのかについての情報がまったく記述されていない。調査対象は明らかに偏っており、塾・予備校の夏期講習に通わない生徒の「構え」についての情報はこの研究からは得られない。コンビニエンスサンプルを用いなければならない事情はよく理解できるが、それならばそれで、より適切な推論を行なうために、実志願者と合格者の「高校階層」の比率とセンター試験の得点分布など、できる限りの補助情報を示さなければならない。

さらに言えば、著者は「本研究は、(中略)、AO入試に取り組む多くの大学に対し、何らかのインプリケーションを付与しうる」というが、「何らかのインプリケーション」とは議論が少々投げやりではないか。少なくとも何についてのインプリケーションなのかは特定すべきである。

以上に指摘した理由から、評者は著者の問題

の中心を的確に把握していると自信をもっては言えないが、著者が、学力レベルが中下位層の高校に在籍する生徒は『教科の筆記試験の負担が軽い AO 入試だから』受験を予定しているのではないかと懸念される」と述べていることから、この懸念が著者の問題意識の中心であると評者は推察した。

「教科の筆記試験の負担が軽い」という理由で AO 入試を受験することが著者にとって深刻な問題であるならば、AO 入試に教科の筆記試験を課せばよい。AO 入試で教科の筆記試験を課しても多面的な評価という趣旨には反しない。そもそも、今回の分析の対象となっている学部課程の個別学力検査で課されるのは総合問題あるいは実技試験であり、教科の筆記試験ではない。にもかかわらず受験勉強している教科数を高校階層間で比較するなどしてあえてこのような懸念を表明する筆者の意図はどこにあるのだろうか。懸念される中下位校の生徒の側からすれば言いがかりのようなものである。

AO 入試は、試験学力だけに偏らない多面的多面的評価に基づく入学者選抜を趣旨とするものである。試験学力には自信がなくてもそれ以外の多様な能力や特性に自信を持つ生徒が志願することは自然であるし、AO 入試の趣旨にも合致する。ところが著者はこうした志願者を否定的にとらえ、そのような「構え」の変容を促すべきであると論じるのである。一方で著者は、上位校の生徒のほとんどが、学力検査以外の面での評価に自信があるわけではなく、単に受験機会を増やすためだけに AO 入試を受験する、つまり、上位校の生徒のほとんどが AO 入試の主旨から外れる志願者であることがこれほど明白に結果に表れているにもかかわらず、これを問題視する様子がない。この事実から得られるインプリケーションは、当該学部課程における AO 入試は多面的多面的評価に基づく入学者選抜を趣旨とするものではない、ということになるが、それでよいのだろうか。

望月論文で分析の対象となっている学部課程の一般選抜に合格するにはセンター試験で

少なくとも 7 割 5 分程度の得点が必要である。これに対し AO 入試では 6 割の得点で済む。7 割 5 分には届かないが 6 割なら何とかなりそうであるという生徒が AO 入試の志願者に含まれるのは当然である。7 割 5 分を得点する自信のあるものは、明らかに最終選抜の要件は満たすことができるので、受験機会を増やすべく AO 入試に出願する。本研究で示された結果は具体的にはこういうことである。さて、AO 入試を実施する他の多くの国立大学は、このことから何らかのインプリケーションを得ることができただろうか。

毎年の志願者の増減にほとんどすべての大学が一喜一憂し、受験者の志願動向やその特性には非常に強い関心を寄せている。そうした中、受験者の志願動向をよく把握する塾や予備校など受験産業に関わる人材を「入試のプロ」と称してもはや傾向が一部に見られる。しかし勘違いしてはならない。彼らは「入試のプロ」ではなく「受験のプロ」である。彼らは、出来るだけ効率的にかつ確実に受験生を志望大学に合格させることを目的とし、どの大学にどれだけ合格させたかによって評価される。著者の「中下位校の生徒の『構え』では、・・・『大学入試センター試験で 6 割以上の得点率』をクリアすることは容易ではない」という言い方は「受験のプロ」の指導そのものに思えてならない。こうしたことを受験生個人の特性として取り上げることに評者は強い違和感を覚える。

我々は「入試のプロ」であらねばならない。「入試のプロ」は、「受験のプロ」に振り回されずに目的に応じた適切な入学者選抜方法の設計を行なえるべきであり、入学させたい生徒を適切に選抜できたかどうかによって評価されるべきである。「入試のプロ」と「受験のプロ」の違いを認識し区別することが、「入試のプロ」たる第一歩であると評者は考える。